

## 実践上の課題に応じた小学校家庭科の授業研究

和歌山大学教育学部 山本 奈美・村田 順子

和歌山大学教育学部附属小学校 中本 奈那

東牟婁地方小学校家庭科研究会 代表 福田ルミ(色川小学校)

### 1.はじめに

本研究課題では、それぞれの連携先と実践上の課題に応じた家庭科の授業研究に取り組み、情報共有・意見交換等の活動を通して大学教員と小学校の家庭科担当教員の双方の立場から、授業力の向上を目指している。継続して行っていく中でメンバーが変わったり、個々の事情によって当該年度の活動には濃淡があったりするため、その都度打ち合わせをしながら進めているのが実情である。今年度の取組としては、附属小学校で行った家庭科における防災学習の内容について報告する。

### 2. 小学校家庭科のまとめとしての防災学習

昨年度の附属小学校では、既習の学習内容と関連付けながら非常用持ち出し袋の見直しを行う防災学習を、「家庭科における『探究』の姿を引き出す指導」を研究テーマとする中で大学教員とともに開発、実践した(授業者:坂本教諭)。子どもたちが生活課題を自分事として捉えられるような題材として、防災袋の見直しは効果的に機能していたと考えられる。既習事項を本題材の中にもどのように配置していくか、教材や指導方法の工夫等について家庭科担当教員と大学教員が協議を重ねることで、改めて小学校家庭科の内容を整理したり、児童の反応を見ながら教材を見直したりすることができた。

今年度は家庭科担当教員が交代となったが、共同研究事業の枠組みの中で情報を共有できていたため、本題材を継続して実施することとした。折しも1月1日に発生した能登半島地震の被害状況等が多く報道されており、避難所での生活の様子などの新たな情報を取り入れることで、防災意識をより高めることができるのではないかと考えた。また、今年度は3学期での授業実践を予定し、6年生の最後に配置される題材「あなたは家庭や地域の宝物」(東京書籍)として指導計画を練り直していった。この題材は、学習指導要領に示された「A 家族・家庭生活」の「(3) 家族や地域の人々との関わり」にあたる。家族や地域の人々との関わりについて、課題をもって、基礎的・基本的な知識のもとによりよい関わりを考え、工夫することができるようにすることをねらいとしている。よりよい関わり方の工夫において、これまで家庭科で学んできたことが活かせるとの理解を促すため、いろいろな世代が集まる避難所の生活を想定し、そこでの関わり方を課題として設定した。家庭科の学習内容は特別に防災学習を謳っていなくても、生活の基本として災害時に活用できる知識やスキルが含まれている。6年生の最後に本題材を位置付けることで、既習事項の定着を図ることにもつながると考えられる。

題材の指導計画は表1に示すとおりで、全6時間の計画に加えて、家庭科で学んだスキルを活かす場面として調理実習または布を用いた製作の実習を追加する予定である。題材の前半で災害時の生活をイメージさせ、これまで家庭科で学んできたことを活かして自分にもできることがありそうだとの見通しを持たせる。災害時の生活上の大きな課題として寒さに対応した着方、住まい方、食

事の栄養バランスの要点を復習し、獲得している知識を生活場面で活用することが自分や周りの人の助けになることを感じさせたい。後半は前半で確認した災害時の生活の課題を解決するために、必要となる備蓄品を学校の備蓄（公助・共助）と個人の防災袋（自助）の点から見直す。最後に題材のまとめとして、避難所を地域コミュニティの1つとしてとらえ、その中で自分が果たす役割を考えさせる。

表1 題材の指導計画

小題材名	時間	学習内容
1. 災害時の生活を考える	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・能登半島地震の様子から、災害時の生活をイメージする。</li> <li>・ライフラインが止まったとき、日常の生活でできることを考える。</li> <li>・教科書 P.123「プロに聞く!」を読み、家族や地域の一員として自分にもできることがあるかもしれないとの見通しをもつ。</li> </ul>
2. 寒さへの対応を考える	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・冬の災害時には「寒さ」が大きな課題であることを知る。</li> <li>・「冬を明るく暖かく」の学習を思い出しながら、暖かく過ごす工夫として着方と住まい方の2点から考え、発表する。</li> <li>・メディア等でさまざまに発信されている工夫も、「動かない空気」による保温が要点であることを確認する。換気の必要性にも触れる。</li> </ul>
3. 災害時の食生活を考える	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・災害発生直後の支援物資には個包装のパンやおにぎりが多い等の災害時の食生活の状況を知る。</li> <li>・食事の量、種類、食事構成の点などから、災害時の食生活の課題に気付く。</li> <li>・温かい、おいしい食事が寒さ対策やストレスの軽減につながるなどの食事の役割にも触れ、調理（炊き出し）ができることの利点を知る。</li> </ul>
4. 学校の備蓄品や備えを考える	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時までの課題を踏まえ、避難所になる学校にはどのような備蓄品があるか、予想する。</li> <li>・備蓄倉庫の実際を確認する。</li> <li>・必要数や種類の点から、よりよい備えとするための提案を考える。</li> </ul>
5. 防災袋の見直し	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人の備えも必要であることに気付く。</li> <li>・各自で準備している防災袋の中身を点検する。</li> <li>・個人の課題に気づき、よりよい備えとするための見直しを行う。</li> <li>・定期的な見直しの必要性に気付く。</li> </ul>
6. 自分のできることを考える	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の避難所は、さまざまな立場の人たちが一時的にでも生活する場になることに気付く。</li> <li>・避難所で過ごすことを想定して、これまでの学習を踏まえ、家族や地域の一員として自分にもできることを考える。</li> <li>・これまで家庭科で学んできたことは、日常生活だけでなく、災害時の生活にも役に立つ知識やスキルであることを確認し、中学校への学びの見通しをもつ。</li> </ul>
7. 学んだスキルを活かす	2~	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ポリ袋炊飯とみそ玉によるみそ汁の調理</li> <li>・避難所で過ごす子どものおもちゃ作り（どちらかを実施）</li> </ul>

本報告書の作成時点で、第2時までの授業実践を終えたところである。第1時で用いたワークシートを図1に示す。ライフラインが止まったときにできなくなる生活行為を整理するために、くま手チャートを用いた昨年度のワークシートを今年度用に修正を加えて用いた。子どもたちは、水道が使える

ないことでトイレやお風呂、洗濯に困ること、電気が使えないことで暖房器具や冷蔵庫が使えないこと、通信ができないことで安否確認の連絡に困ること、調べたいことが調べられないなどの困難性に気付いていた(図 2)。これらの困りごとに対し、避難所で自分たちにできそうなこととしては、「迷惑をかけない」「お手伝いをする」「挨拶をして仲良くする」といった基本的な姿勢を示すことができていた。これからの授業を通じて、その内容を具体化させていきたい。

第 2 時は寒さへの対応として、避難所での資源が限られた環境下で暖かく過ごす工夫を着方と住まい方の 2 点から考え、発表した。重ね着をする、袖や首回りがつまった服を着るなど、「冬を明るく暖かく」の学習を思い出しながら出された意見を、授業者が「動かない空気」と「あたたまった空気の動き」をキーワードに整理していった。最後に大学教員が、災害時にはポリ袋や新聞紙も空気を利用した同じ原理で活用できることを伝えた。今後、授業実践を続け、子どもたちの振り返りシート等から成果を分析する予定である。

本題材は「自分たちにできること」を考えることが主な内容であるため、子どもたちからの関わりや頑張りを促すことになるが、被災地では子どもの心のケアも課題となっている。指導上の配慮としては、「頑張り過ぎない」ことの大切さもメッセージとして伝えていきたいと考えている。

### 3.おわりに

本題材はこれまでの共同研究事業での成果をもとに、今年度の取組として再構成したものである。授業の一部は大学教員も実践に参加し、子どもたちと直接かかわる機会を得た。共同研究の実施上の課題としては、大学の授業が開講されている時期に、小学校の授業に参加できる曜日が限定されてしまうことである。小学校家庭科の時間数は他教科に比べて少なく、授業実践の機会が限られる。大学教員が授業に参加することで得られるものは多いが、大学のカリキュラムの変更もあり、次年度以降はさらにその時間の捻出と調整が課題となっている。

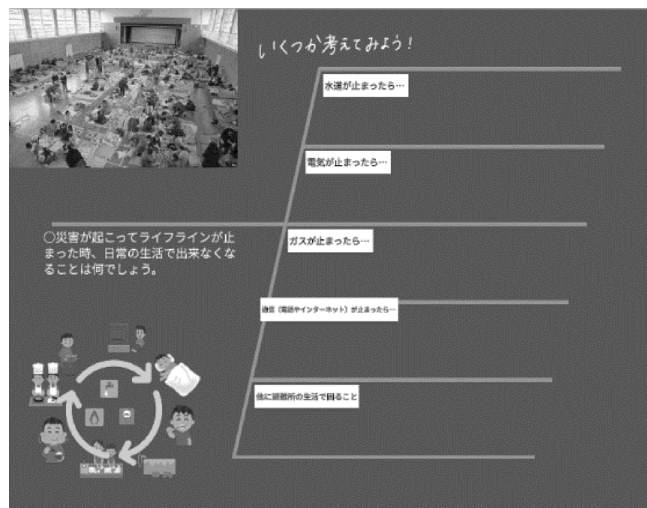


図 1 第 1 時で用いたワークシート  
(ライフラインが止まったら)



図 2 第 1 時の授業の様子(各自で図 1 のワークシートに「できなくなることを記入」)